

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

新島学園女子短期大学新島文化研究所編
『敬虔なるリベラリスト』

(新教出版社 一、五〇〇円版)
(二九八頁)

本書は、新島学園短期大学新島文化研究所の編になる、故岩井文男の追悼のための記念文集ともいえよう。第一部は「岩井文男の思想」として、同氏の説教、論文、回想録を収めている。第二部は「岩井文男の生涯」として、同氏の友人、知人による同氏についての追想を収録している。

本書において述べられているように、岩井さんは、賀川豊彦、杉山元治郎、中島重といった当時の敬虔な基督者であり、しかもキリスト教社会運動の推進者であった人

達の影響を受け、農村伝道という困難なしかも報われることが少ない仕事に献身し、その晩年の短い期間を、同志社大学及び新島学園において教育事業に携ったのであった。本書の編集者である高道基氏が岩井さんについて「つねにフロントの役割を担わされながら、時代の変転のなかで梯子を外され、孤立し、もがき、涙することも多かったにちがいない。」僕か賀川さんに欺されちゃってね」というのが筆者が聞いた最後のジョークであった。」と述べているように、彼の福音主義的信仰の中に内包されていた隣人愛としてのキリスト教社会倫理の緊迫は、当時の社会の底辺にあった農民伝道に彼を導いたのであった。

岩井さんの同志社大学神学科在学時代及び晩年の同志社大学宗教部長あるいは学生部長時代に行動を共にした者として、同氏のキリスト教信仰によってリファインされた古武士的ともいえる気骨を感じさせられたことを記憶している。あの岩井さんの鳩の如く柔和な一種独特な微笑と、ある時には一転して鷹のような鋭い眼光に変化するのを忘れることはできない。岩井さんは、

話に熱がこもり又議論が進むと「口角あわを飛ばす」という表現は、彼の為にあると思われるほど、口のまわりには泡が吹き出るのであった。

岩井さんがもっていた強い正義感、彼をして社会悪に眼を向けしめ、彼を中島重氏の主宰する社会的基督教運動に参加せしめたのであった。彼は機関誌「社会的基督教」の中で、「吾等の祈願をして空虚ならしめたものは何か、それは現代資本主義文化である。自由競争に根ざしたマンモニズム(拜金主義)である。吾々には斯るサタンを如何して超克するかが残された吾等の使命ではないか」と述べている。彼のキリストの教えた隣人愛への信仰は、キリスト教社会倫理の実践へと彼を導いたのであった。

駒井四郎(大阪女子学園理事長)
浅香勝輔ほか著

『日本史教育の舞台と背景』

(教育出版 A五版)
(四一〇頁 二、八〇〇円)

過去の人間の生の痕跡を追体験することにより、現在を生き抜く豊かな人間性を涵

養し、未来に向って歴史創造の主体となる
ことが歴史教育の大きな目的であろう。し
かし、実際は必ずしもこうした目的が達成
される方向にあるとは言い難い。歴史とい
えば、年代や歴史的文脈から切り離された
無味乾燥な出来事の暗記を主体とした学習
というイメージを持つ学生が多いことも事
実である。この傾向は、受験競争の激化に
ともない益々強まっている。このような現
状をふまえて、日本史教育の在り方を、そ
の方法の問題まで掘りさげて論じたのが浅
香、橋場、金子、谷川各氏の共著による
『日本史教育の舞台と背景』である。

本書は二部から構成されており、一部で
は京都という一地域の歴史的景観を時代の
経過に沿って教材化する理論と、その具体
例を提示した浅香勝輔氏の「日本史教育の
舞台としての京都の教材構成の理論と実
際」、今や現代人の生活と切り離せない映
像文化を日本史教育の中でどのように位置
づけるかという問題を論じた橋場洋一氏の
「日本史教育を左右する映像文化」、そして
「ナガメ」を歴史学習の教材として採用す
ることを提唱し、教室という限定された学

習の場を空間的にも拡大して、人間は歴史
とともに生活するという事実を実感させる
学習方法を提示した金子邦秀氏の「日本史
教育に必要な野外巡検指導」、日本史教育
に欠くことのできない生活文化の具体的理
解という課題を、民俗学との関連で論じた
谷川章雄氏の「日本史教育と都市・農村の
民俗」の四論文を通して、日本史教育の新
たな理論と方法が提示されている。

一部で明示された理論と方法に基づき、
日本史教育に携わる協力者を加えて、山、
川、海、島、火山、湖、高原などの自然景
観や空港、バス、私鉄、球場、駅などのい
わば近代的な人文景観及び蔵、町並、墓地
など、その変遷が歴史を語る景観など、人
々が日常的に関係する生活景観を日本史教
育の観点から具体的に論じたのが二部であ
る。本書は、歴史的景観を通して生活と歴
史学習とを結びつけることにより、日本史
教育が今日直面している問題を克服する一
つの具体的な方法を提示するとともに、歴
史学習の質的な転換を促すものであるとい
えよう。こうした意味から、日本史教育に
携わる研究者、教職関係者、学生に限ら

ず、広く歴史学や教育学を学ぶ人にも得る
ところが大きい書物である。

沖田行司（大学文学部助教授）

西岡 一著

『食害』

（合同出版 関 B六版）
二三四頁 九八〇円

現在のわれわれの周辺には様々な危険が
満ち満ちている。それらの中で生物として
の生存にかかわる最も基本的なものは大
気、水質、食品汚染であろう。空気、水、
食物汚染といったのだが、それでは意を
尽せないところが問題なのである。文明に
よって、更に最近の科学技術によってより
広域化、複雑化、危険化してきたといっ
てよい。昔のように単に空気と水と食物があ
れば生きられるとは言えず、それらの質
（無害性）が特に問題になってきている。こ
こではこれらの中で食品汚染について書か
れた「食害」について紹介する。

人類は誕生以来、食物を自然の中から選
びとり現在に至った。その選びとり方次第
では死が待っていたので、自然、食物に対
する感謝の念が起ったのであろう。現在、

この心が失われたことが先ず指摘されている。世界の何処かで飢に苦しむ人がいるのに、食べ残しが何でもないこととなつてしまった。残念なことである。その主な原因は加工食品にあると著者は述べている。もともと食べ物は生き物で農林水産物であったが、今や工業製品に変わりつつあるのだ。だからこそ大量生産、長期保存、長距離輸送も可能になり有難味が減つてきてしまつた。これらの三点を可能にしたのが食品添加物という人工化学物質群であり、これらによつて現在の食生活が支配されつつあるということとは著者と同感である。

人類の長い歴史の間に殆んど大部分の有害な自然の食物は人為淘汰（有害性の検討による排除）を受けて消し去られ、最近迄はまず安全な物のみを食べてきたといえよう。ところが、現在の人工の食品添加物が充分な人為淘汰を受けているであろうか。

その試験台が直接人間で、特に日本で、中でも若い人であることに問題がある。摂取量は少なくても、胎児に奇形を起したり、癌にしたり、子孫に悪い遺伝を伝える変化を起す（突然変異）可能性のあるものが数

多くあるとみられる。またこれらの複合による毒性の高まり、精神や行動への影響なども指摘されている。

今迄の食品公害は氷山の一角ともいえ、これらの弊害の除去が急務であろう。この「食害」という本では、これらの問題点を詳しく述べている。将来とも健康に、安心して楽しく生きてゆくためにも一読をおすすめする。

小林直正（大学工学部教授）

井ヶ田良治著

『近世村落の身分構造』

（国書刊行会 四三七頁 八、〇〇〇円） A五版

昨秋刊行された本書は『同志社法学』と本学人文科学研究所の叢書・機関誌に掲載された労作に加筆されたものである。本書を貫く著者の基本的な考えは「村内身分は村の共同所持・共同利益山林に対する諸權利と不可分に結びついている。むしろ、山利用の權利の有無・大小によつて、村内身分の内容とあり方を知ることができる」という観点であり、村内身分と山林利益との關係に重点をおいて分析されている。

第一章「近世村落身分と村持山」は丹波国桑田郡山国郷中江村（京都府北桑田郡京北町中江）において、中世山国庄の特権身分である名主連合所有の惣庄山が、太閤検地を境に村持山へ解体する経過を述べ、太閤検地以後の村が、分割された村持山にどのように關係するかを、旧特権身分と新興小百姓層とが近世村落身分へ再編成される状況との関連で詳細に追求する。

第二章「近世村落身分秩序の成立と動揺」は丹波国桑田郡馬路村（京都府亀岡市馬路町）において、中世以降、村の支配権を掌握してきた人見・中川の両苗の郷士仲間が、幕府や旗本の支配下にあつて、近世中期以降、仲間の再編強化のための帯刀要求により、両苗から疎外された小百姓の台頭を圧し、両苗身分の優位性を持続せんとする村落の特長ある構造を描き出している。

第三章「近世村落身分秩序の諸矛盾」は丹波国桑田郡保津村（亀岡市保津町）において、長尾・桂・石川・永井・村上の郷士身分の五苗による集团的村落支配のあり方を、近世初期から明治時代にかけて詳細に

追求した長大な叙述である。とくに近世中期以降、小百姓の台頭によって五苗支配が解体してゆく過程を、両者の日常生活における対立の中に浮彫りにする。また補論では同村内の被差別部落民が、明治期に入会山用益の差別にどのように挑んでゆくかについて、近世に溯って具体的な差別の実態から追跡している。

第四章「近世村落身分秩序の崩壊」は奈良県吉野郡中庄村檜尾の共有山林について、明治中期まで存続していた公事家仲間と称される特権の入会団体と公事家山との関係に重点をおいて論述する。公事家の家格にも格差があって、木材の商品化にともない共有山林の売買が盛んになり、公事家仲間内部に対立が生じ解体へと向い、地域共有（区有）山化が進行する。それは国家的承認の下に「区」が成立したことによる、公事家共有山が区有財産化され、村民の等質化が進み、近世的な村落秩序は崩壊するとされる。

著者が「近世村落の身分階層秩序の変遷を全体として理解できるように努めた」とする本書は、江戸時代の近畿村落の秩序、

身分の成立・展開・解体を史料をかみ砕いて説明しており、われわれの先代や先々代が生きていた頃まで確実に残存していた社会秩序の存在の意味と、その歴史的意義を平易に叙述した好論である。

仲村 研（大学人文科学研究所教授）
杉江雅彦著

『投機と先物取引の理論』

——わが国先物取引制度の成立に関する研究——

（千倉書房 三、八〇〇円）
（A五版）

投機は悪であるとする倫理感が社会通念となつてゐる。著者はこれに対して疑問を投げかけ、投機と先物取引の役割を経済活動の中に正確に位置づけようと試みてゐる。その努力の現代的意義としては、現在国債の大量発行と金融機関による巨額の国債保有が実現している状態のもとで、国債価格の変動にともなう危険を回避するためにも、先物取引制度の導入が必要と考えられるようになり、その議論もはじまつたという点にある。

本書の第一部は、わが国における先物取

引制度の発生と展開の過程を歴史的に跡づけたものであるが、その考証の内容は日本経済史の一分野の業績としてみても十分といえるほど充実している。また、その中で、米切手市場の発生をもって先物取引市場の成立とみるのか、あるいは延米取引をそこに位置づけるのかの議論にふれ、後者の側を正しいとするなど、著者としての見解を示している。

第二部では、投機と先物取引に関する理論的研究と題して、主として先学の見解と論争を紹介し、要約し、投機、先物取引、米取引をめぐる諸説を網羅している。そのため、これを読むことによって、この分野における問題の所在を理解し、自分なりの見解を持つことができるようになってゐる。その意味で、非常に親切な本でもあり、著者の読者に対する配慮を感じることができ

る。諸学説の整理の後で、著者は次のような言葉で自説を要約する。

「それでも、投機という行動が持つ経済的効果の点から判断するならば、それはやはり、賭博や娯楽とは異質の行動として、

肯定的に評価しなければならぬ性格のものであると考えられる。投機の経済的效果とは、結局のところ、①価格安定効果、②売買機会増大効果、③市場性・流動性増加効果に集約されるものと思われるが……。

この三つの効果のうち、①についてはフリードマン命題として説明しながら、これには「投機者が価格予測に成功した場合のみ価格が安定するかどうかは実証が困難であり、むしろ反対に、投機者の参入によって価格が不安定に陥る場合もありうる」と批判を投げかけている。そのうえで「投機のマイナス効果を防除するための有効な政策や規制に期待がかけられるとすれば、投機が有効に働く場として、先物市場の開設は十分に意義深いものと思われる」といって、最初に提起した論題に対する解答としている。

小林良彰（大学商学部教授）

和田洋一著

『わたしの始末書』

（日本基督教団出版局 B六版）
（二二九頁 一、五〇〇円）

著者から昨年の元旦にいただいた年賀状

に「わたしは、野球でいえば今は八回、一回から七回までは内野安打か四球で出塁したていどでした。八〇歳をこえた機会に奮起して『明治・大正・昭和を生きる』を書きあげましたが、本になるのは二月末でしょうか。平凡な外野フライにおおらないよう願っています」とあったが、実際には書名は『わたしの始末書—キリスト教・革命・戦争—』と変わり、出版は九月末になった。つねにじっくり考える著者の執筆態度から、そうだったのである。

著者は、八幡太郎源義家以来の家系を誇る家に生まれながら親に無断でキリスト教の洗礼を受け、同志社大学で心理学を講じていた和田琳熊^{（りんくま）}の長男として生まれた。室町教会で幼児洗礼を受けクリスチャンホームで育った著者が、同志社中学校・三高・京大独文で学び、その後同志社予科ドイツ語講師となったものの、有名な『世界文化』事件で辞職し、失業生活や新聞記者生活を経て日本の敗戦を迎え、同志社へ復職するまでの半生の思想の形成・変容を、大正から昭和の時代の激変の過程との関連で描いた自叙伝である。

しかし本書は単なる自叙伝ではなく、まだ反戦の可能性が若干は残されていた一五年戦争前の数年間こそ決定的に重要であったのに、四球どころかばやっと思送り三振してしまったと反省する痛恨の「始末書」である。と同時に著者が属し続けているキリスト教界と、大きく傾斜し大いなる同情をよせ続けてきた革命運動陣営が、未だに見送り三振したとの自覚もないことに対する、遅ればせながらのしかし鋭い批判の書である。だからといって堅苦しいものではなく、新聞記者時代の賜であろうか、大変読みやすい。本書は、「カーン」という鋭い打球の音がする二塁打か、三塁打であろうか。願わくば、戦後著者が大きくかわった朝鮮・韓国問題や京都の人民戦線運動さらには学生運動にも筆を及ぼして後半生の自叙伝も書き上げ、ランニングホームマーとしていただきたいものである。

最後に、「日本はアジアの諸国民、諸民族にたいしてさんざん害を加えながら、そのことを忘れて、いたずらに被害者面をするのが好きな日本人がたくさんいて、わたしは何ともやりきれない気持ちになる。地上

における唯一の被爆国民として反核運動に力をいれるのはよい。しかし南京その他のアジアの各地で行なった非人道を忘れて、毎年八月の始めに広島、長崎ばかりを叫ぶのはやめた方がいい」という箇所、最も共鳴したことを述べて紹介を終わりたい。

辻野 功（京都芸術短期大学教授）

ヘルガ・エング著

深田尚彦訳

『児童の描画心理学』

（ナカニシヤ出版 A五版）
（二三三頁 三二〇〇円）

本書はノルウェーのヘルガ・エング女史（元オスロ大学・臨床心理学研究所長の著）『The Psychology of Children's Drawings—From the first stroke to the completed drawing』（1931）の第二版の訳出書である。エング自身の原著は一九二七年に発表され、本書はH・ハットフィールドによる英訳である。訳者は同志社女子大学教授であり、児童心理学の専攻かつ我が国の児童画研究の第一人者である。

本書は四部からなり、第一部では、著者

の姪マーガレットの生後第一年目から第八年目までに描かれた絵を資料として、描画時の細かい観察と描かれた絵について詳細な心理的解釈を行なった、いわゆる「伝記的研究」である。第二部は、児童の発達初期に見られる「スクリブル描き」から、児童期の後期近くに見られる「装飾」に至る発達の経過を、児童自身の心理的発達に即しながら詳細に、また多くの児童心理学者たちの見解をも引用しながら著者自身の見解を展開させている。ここではエングの深くそして広汎な見識が余す所なく展開されていて興味深い。第三部は児童の絵画が精神発達の表現であるとする前提に立つて、彼らが描いた絵が心の成長の図的表示であるとし、児童の精神発達と描画との間に見られる関係を発達心理学的に解明しようとする。続く第四部で著者は一般美術と児童画との対応性を論じ、旧石器時代の洞窟画、あるいはブッシュマンやエスキモーなどの未開民族に見られる自然的美術作品との比較を通して、児童による描画の本質に迫ろうとする。

本書の構成は以上の如くであるが、我々

は六十年前前にこの様な優れた研究成果が発表されていたことに改めて驚きと敬意を禁じ得ないのであり、またコンピュータなどの機器や統計技術の発展とともにますます数量化的な方法が多くとられる心理学の現状（発達心理学といえども例外ではない）の中で、こうした「伝記的方法」が用いられた研究に接して今更ながら心理学の原点に触れ得た感が深いのである。

エングの功績は勿論であるが、それ了我々に伝えるものは訳者の優れた訳文と、児童の描画に対する深く広い知見であることは言うまでもない。訳者はエングの世界の一員となり、彼女の世界を自分の物として我々に示してくれているのである。訳者に深い敬意を払う所以である。

野辺地正之（大学文学部教授）

石井淳蔵著

『日本企業のマーケティング行動』

（日本経済新聞社 B六版）
（二三六頁 一、六〇〇円）

著作や論文を公刊するとき、それが幅広い読者層の興味を惹起することを願わない

者はいないだろう。研究者の問題意識を刺激し、学生の学習意欲を喚起することは勿論のこと、当該問題と現実に関与する現場の人々へ新しい視野を提供したいという要求は、おそらく分野を問わず共通であろう。しかし、こうした要求を同時に満たすのは必ずしも容易なことではない。一方では複雑な現実の諸事象に対する瑞々しい感性と深い洞察が、他方ではそれらの簡潔な整理と叙述が必要だからである。だが、石井さんの本書は、随所に散りばめられた多様な豊富な日本企業の事例と、それを統一的な視点から説明したいという強い意欲に支えられた鋭い切り込みでこの困難を見事に突破している。

本書の意図は、なぜある戦略が成功し別の戦略が失敗するのかを分析することにある。事業の永続的な成長の鍵は環境（市場と技術）―競争戦略―組織―経営資源のバランスを操作することに尽きると考え、しかも結局この四つの変数を統合する役割は戦略が担うと喝破した著者が、多様な日本企業のマーケティング行動と競争戦略の成否事例のなかからこのバランスの操作過程

を検証したものである。第一章はVTR業界と複写機業界の事例から戦略の基本要素を探ることにあてられている。そこでは競争戦略が二つの基本要素から成ること、つまり一つは事業への関与度ともいふべき製品ラインの広がり、他のもう一つは競争の出発点ともいふべき事業をどう定義するかであることが確定される。第二章では事業の関与度を基準とした戦略タイプの成功の条件が検討され、第三章は事業定義を軸に競争戦略が検討されている。第四章は環境―戦略―組織―経営資源のバランスを如何にとるかが論じられ、第五章では競争の新しいコンセプトの必要性が語られている。

総じて本書は簡潔で説得的な展開がなされているが、特に本書の大きな魅力は、環境―戦略―組織―経営資源の関係を事業定義という戦略要素を中心に、情報とその処理というコンセプトによって一貫した整理を狙った点であろう。競争戦略のコアは絶えず製品革新にあること、それは情報の格差を創造しながら有利な取引を企図するものであること、そのことは事業をどう定

義するかに関接に関わっているとする著者の展開は、激しい技術革新のもとの現代企業の競争のエッセンスを鮮やかに描きだしているといえよう。また、周知の企業がどこに登場するかも楽しい。

廣川勝美著

岡本博公（大学商学部助教授）

『ものがたり研究序説 伝承史的方法論』

（桜楓刊）
（四一―一頁） 四、八〇〇円

廣川先生はこの著書の「あとがき」で「この書は、つまるところ、ひとつの信仰告白になるのであらうか」と書いておられる。国文学の研究書として、それが信仰告白に他ならないということは黙過できないことである。信仰を問うことと学問を深めることが不可分のこととされていることこそ、研究者たる存在が踏まれているということである。さらにそのことが、まさに同志社大学において可能である学問だということとは意義深いものでなければならぬ。研究において方法というものがますます問われるべきことである。先生が聖書学とりわけ伝承史的方法論に拠りつつ、国文

学研究に全く新しいパースペクティヴを切り開かれたことは、この書のどこを開いても明らかである。

テキストという語ひとつをとってみても、それはローマ教皇の保有する唯一の聖なるテキストたる聖書であり、神と人との関係を織りなす構築物であるとされる。古代文学研究において、伝承としてのテキストをそのような、神と人との関係を語る仕掛け・装置とみることで、従来の研究がまさに近代にあることにおいて近代科学のまなざしにいかにとらわれていたかを鋭く批判することになるのである。

より特記すべきことは、先生の研究が一九七五年以来先生の先頭になっておしすすめられてきた日本各地のフィールド調査の成果にもとづくということである。フィールド調査がややもするとそれ自体として自らを閉じていく研究の多い中で、フィールドにおける採録から仮構される伝承としてのモデルと古代文学を伝承構成体とみることに於いて両者を架橋するところに新しい国文学研究の方法の提示がみられるのである。

さてこの著書は、

まえがき

序章 ものがたりの視座

一章 ものがたりの古層

二章 ものがたりの基層

三章 ものがたりの始原

四章 ものがたりの構造

五章 ものがたりの様式

六章 ものがたりの系譜

七章 ものがたりの伝承

あとがき

という章立てから成っている。これを見るだけでも先生の学問研究がいかに整合性を保ちつつ、より全体を見通そうとする統一性のもとにすすめられているかということが明らかであろう。源氏物語から始められた先生の研究が伝承学として結実したこの著書は、これからの国文学研究にとって根本的な問いを発しつつけるであろうと予想されるものである。

広田 収（大学文学部助教授）

手塚竜磨著

『頂きに憩う——随想と論考』

（新教出版社事業部 B六版
三四二頁 非売品）

著者は同志社大学英文学科の一九二二年卒業生で、十年余り中学の英語教育にたずさわったのち東京市役所に入り、都庁においては都政資料館（現、東京都公文書館）の館長をつとめた人。日本英学史学会員（評議員）としてめざましい研究を続け、『英学史の周辺』（一九六八）と『日本近代化の先駆者たち』（一九七五）の二著を世に問うて好評を博してきた著者が、八十六歳を迎え、「生涯の頂点にたっている思いで」この三冊目の著書を『頂きに憩う』と題して世に問うた。英学史家として最長老である著者の、年老いて衰えを見せぬ気魄と探求精神ともに、著者の暖い人間味がじんわりと伝わってくる書物である。

それはひとつには、本書の中のアチコチにちりばめられている手塚さんの自叙的なエッセイのせいであるかもしれない。卒業論文にD・G・ロセッティを選んだ手塚さんに、若き日の文学青年の姿を見出して、

はほえずにいられない。園頼三先生との長くて深い交流の話にも胸を打たれる。ヨーロッパ留学から帰ったばかりの新進の学者園先生が、若い英語教師であつた手塚さんに招かれて木曾福島の地においてひと夏を共にすごされた話も出てくる。しかし手塚さんは一八八二年に新島襄が徳富猪一郎、湯浅吉郎、伊勢時雄らをともなつて木曾路を旅したときの状況をも克明に跡付け、新島から一緒に入りましようとなつて同じ浴槽に蘇峰、半月ともに入れなかつたという田中屋の跡まで調査したことが記されている。

この書で感銘を受けることのひとつは、手塚さんが新島襄全集の最も熱心かつ精緻な読者の一人だということである。本書には既刊の三冊（第一、第二、第五巻）に関する詳細で行き届いた反応が掲載されている。ことに「一致・組合両教会合併問題についての断片的な覚え書」は新島に関する評価のわかれる微妙かつ重要な問題であるが、著者は是を是とし、非は非とする公正な態度を堅持し、しかもプロテスタント伝道史の長期的な眺望の中で暖い理解を示し

ている。新島の箱館脱出のときの恩人福士成豊の傭い主ボーターの墓の研究、従来の新島伝をたぶらかし続けてきたウィルキーの実像に迫る試み等に、この書には歴史的真実探求の成果がいくつも含まれている。同志社人を励まし、勇気付けずにはおかない書物である。

北垣宗治（大学文学部教授）

キャサリン・リム著

幸節みゆき訳

『シンガポールリアン・シンガポール』

（段々社 二五九頁 一、五〇〇円）
（B五版）

「日本とシンガポールは、色々な点で似ているのではないでしょうか……とりわけ、現代の進歩と長い間尊ばれて来た伝統との避けがたい衝突から生じる、様々な問題に対する取り組みについて、そう言えるのではないかと思います」と、一九四二年生まれの若い中国系シンガポール人で英語作家であるキャサリン・リムは日本の読者に寄せる文に記している。たしかに一八篇の短編小説のほとんどは日本が舞台になつ

ていても少しもおかしくないし、それらは価値観の対立から生まれる様々な生活の断面が執拗に描かれたものである。それらの断面は、あくどいほど残忍であつたり、あまりにも悲惨すぎたり、滑稽すぎて笑うこともできないような種類のもので、人間の心の奥底にひそむ感情と感情の生々しい衝突の物語である。

ひとつ例を引いてみよう。本書の原題名となつている「さもなくは雷神が」という短編小説は、姑とのいざこざを会社と同僚と話しあつては憂さ晴らしをしているマーガレットという女性が、結婚後六年目にして、「新しい葉の効き目」で妊娠したが、姑が自分を呪っている夢や死産をする夢などをみて、精神錯乱をおこしてしまう。実家の母親が祈禱師に相談すると、祈禱師は姑にまじないの言葉を書いてもらい、それを燃やした灰を水に溶かして飲ませると呪いがとけると言う。姑の煎じる漢方薬も、姑がする神降ろしの儀式も、母の言う親不幸者に落ちる雷の天罰も、古いことは一切信じなかつたマーガレットが、自分の胎児が助かるという祈禱師の言葉を信じ、姑に無

理矢理にまじらない言葉を書いてもらう。祈禱師の指示通りにしたマーガレットは「有難く恭々しく、最後の一滴まで残さず飲み干した」という物語である。

ここには嫁と姑というどこにでもみられる対立だけではなくて、古い価値観と新しい価値観の対立がある。さらには西欧的文化と東洋の文化の対立もある。

訳者が「あとがき」に言うように、シンガポールは「新旧の価値の衝突に加えて、マレー系、インド系、中国系からなる多民族多言語」の国であるから、そこには「民族・文化の違いから生じる価値の対立」がある。その上、国民はそれぞれはマレー系があつたり、インド系であつたり、中国系でありながら、「マレー人でもインド人でも中国人でもないシンガポール人のシンガポール（シンガポリーアン・シンガポール）」という国を造ろうとするものたちのアイデンティティ模索の衝突がある。シンガポールとはこういう国だから、短編小説の素材にはこと欠かないところである。

この短編小説集を読んでいると、表面は美しいこの若い発展途上にある近代的都市

国家が孕んでいる様々な相克の人間模様をいながらにして垣間見る思いがする。訳者はイギリスの現代詩人T・S・エリオットの研究者であると同時に、すでに『異邦のことば——シンガポール、マレーシア英語詩選』（幻想社、一九八〇年）や『シンガポール短編集』Ⅰ、Ⅱ（幻想社、一九八三年）を訳出している「シンガポール学」に詳しい人であるから、登場人物たちの精神構造を見抜き、どの作品も見事な日本語におきかえている。

岩山太次郎（大学文学部教授）

篠原総一・原 信編

『アメリカの高金利政策』

（有斐閣 二五〇頁 一、三〇〇円）
（B6版）

アメリカの高金利は、世界経済をおかしくしている要因として、おそらくワースト・スリーの一つにはいるだろう、にもかかわらず、なぜアメリカで一時は二〇パーセントもの高金利が生じ、いまなお続いているのかということについては、これまで十分な説明がなされてきたとはいえない。本書はこうしたアメリカの高金利問題に真

正面からとり組んだ経済書であり、読者の知りたいポイントの多くを理論的に解明している。

なお、編者の一人の篠原氏は、マクロ経済学と国際経済学を専攻する本学・経済学部の教授であり、執筆者としては第三章を担当されている。

本書の第一章では、まず金融政策の基礎概念が理論的に、しかし、きわめて平易に解説され、アメリカの金融政策の概観が示される。

第二章では、アメリカの金融市場においてフェデラル・ファンド・レートを中心に金利体系がきまつていく仕組みが解説されたあと、金融政策の操作目標を金利からマネーサプライに移す政策変更と、マネーサプライ管理に伴う攪乱とが高金利を生じさせたメカニズムが説明される。本書のテーマの中心部分をなすわけであるが、それだけに、最もむずかしい章ともいえる。

第三章では、インフレと高金利の問題にしばって、「レーガノミックス」の経済運営観が正統派サプライサイド経済学による診断と処方を中心に、簡潔・明快に解説さ

れる。ケインズ政策からの政策転換の最大の契機となったインフレのコストが如何に深刻なものであったか、また、アメリカ国内では「高金利」といっても、税引後実質利子率はせいぜい一パーセント前後にすぎないことを、本章によってはじめて教えられた読者も少なくないであろう。マクロ経済学の重要性和面白さを改めて味わせてくれる一章である。

第四章では、アメリカの高金利がフロート制のもとで外国経済に伝播していくメカニズムがわかり易く解説され、わが国と西欧諸国にたいするアメリカの高金利の衝撃と対応策が比較考察され、さらに、累積債務問題との関連が分析されている。広範な守備範囲が見事にこなされている。

第五章では、アメリカにおけるいわゆる「金融革命」が高金利との関連でとりあげられる。この問題に関しては類書も多いが、本章も実によくこなれている。

本書は、全体として、限られた紙幅でアメリカの高金利がうみだされた背景とメカニズム、そしてその影響について、わかり易く、しかも理論的水準を落すことなく、

体系的に論じた第一級の経済書といえるだろう。

野間俊威（大学経済学部教授）

大谷 實著

『刑法講義総論』（上）

（成文堂刊 二五二頁 一、七〇〇円）
A五版

戦後も刑法理論における犯罪論は旧派（客観主義・行為主義）と新派（主観主義・行為者主義）の論争とその対立克服に始まり、やがて、制定された新憲法の人権尊重・平等主義などの精神が浸透してくるにつれて、新派理論が衰退し、罪刑法定主義が強調され、旧派理論は完全に支配的となる。このような状況下で研究生活をスタートされた大谷教授は客観主義刑法理論と目的刑論の融合を目ざされ、その後、世に問うた数多くの著書、論文を踏まえううえで、教授の刑法理論体系の前半部分が上梓されたのである。それが『刑法講義総論』（上）である。この書物には類書と異なる種々の特徴が見出されるが、次の点において画期的意義をもつと思われる。

現在、刑法学において、「行為無価値か、

結果的無価値か」という問題を中心とする根本的対立がある。この対立は違法の本質を法益侵害という結果の無価値におく立場（結果無価値論）と法益侵害のほかに行為の反社会性をも考慮すべきであるとする立場（行為無価値論）との争いに根ざす。そこで大谷教授は、「いずれか一方にのみ立脚して現行刑法を解釈するのは困難である」とされ、その止揚した理論体系の構築を目ざされた。すなわち、たとえば過失犯にその一例をみることができ。当初、大谷教授は伝統的過失論（旧過失論）によっていたが、法益侵害の結果が発生しさえすれば、偶然または不可抗力とみるべき場合でも構成要件該当性および違法性を肯定せざるをえないというのは妥当でないとして、過失犯にとって本質的なことは結果の無価値でなく社会生活上必要な平均人として要求される注意を怠った（客観的注意義務違反）行為の無価値にあるとする新過失論の立場をとるに至った。その理由は、処罰の範囲を合理的・明確に画することができる点に理論としての正当性があり、このように考える方が国民の法感情に合致するとされ

る。教授の思索の背景には、人権保障という理念の現代における本質・機能について極めて深い洞察が存すると思われる。刑法理論体系書は刑法学者にとって自己の歩みの一つの区切りであるとい一般的にいわれるが、本書は刑法理論上の対立克服のいわば第二の出発点とみることができるのであり、画期的な教科書として位置づける理由である。また、理論的妥当性のためには過去の自説をも克服の対象とするまさに血と汗の道程を歩む大谷教授の学問的営為には多くの教訓が示されているように思われてならない。近々、出版予定の下巻を待望すること切なるゆえんである。

藤岡一郎（京都産業大学法学部助教授）

斉藤 勇著

『カンタベリ物語』

（中央公論社 新書版
一八六頁 四六〇円）

イギリス文学最高峰の一つ、『カンタベリ物語』は十四世紀末のチャウサーが韻文で書いた今昔物語集である。ロンドン橋を南へ下がったサザークに陣羽織亭なる旅館がある。そこに二十九人の巡礼が勢揃い。

旅館の亭主の肝入りでロンドンからのカンタベリ詣での道中のつれづれを話しくらべで紛らわそうという趣向となる。

チャウサーの作品と同じ書名を冠した本書の著者は、当時の読者とは聴衆で、チャウサーは朗読又は朗唱した、との指摘から説き起す。そして、「序の歌」の中の一行、「自然はこれほどに彼等の心をくすぐるのですぞ」（29頁）の分析を始める。「彼等」とは「小鳥たち」と特定し、「心をくすぐる」とは「生殖の思いをくすぐる」とする。この自然界の営みが、人間界の営みを刺激して、人間は巡礼へと旅心を募らせる。巡礼は『カンタベリ物語』の枠組みとなり、現実と理想との乖離の調整機構として働く。しかし、自然界の生殖への衝動と人間界の信心業としての巡礼への衝動とは全く相容れぬかに見えるが、実は同じところから発しているのではないかと、著者はさぐりを入れる。つまり、巡礼の建前は信心業であっても、その本音は遊びであったからである。遊びであるからこそ、そこに特有の笑いが生まれる。短い滑稽詩であるアクション中心のファブリオ、主題と文体

との不釣り合いからかもし出されるバレースク、エピソードの繋ぎ方に発生するずれが『カンタベリ物語』の笑いの源泉と定める。

その笑いは「二つの観念の間の不釣り合いから生れる」（175頁）として、「ヒューモアにおける笑いは自分をも含めて笑う」（176頁）ものであり、「アイロニーがつきまとう」（176頁）ものである。さらに、チャウサーの笑いにある「ヒューモラスなアイロニー」（176頁）が発生する原因は、詩人チャウサーが巡礼チャウサーと峻別できないところから来る、とする。また、巡礼が信心業であって遊びであるからこそ「真面目な話のあとに肩の凝らない話が配分される、という原則」（162頁）が生み出されうると、著者は考える。

本書は4章で構成されている。形式（枠組としての巡礼の意味）と内容（笑い）の視座が安定し、文学用語（ファブリオ、バレースク、パロディ、ロマンス、ヒューモア等）を正確に定義した上、平易に伝える姿勢を堅持し、よく練れた読み易い文章で『カンタベリ物語』の世界の面白さを語っている。チャウサーの平衡感覚がそのまま

著者の平衡感覚でもあるほどチョーサーを自家藁籠中の物にして初めてできる啓蒙書である。就中、訳は名訳といふべき出来栄で、その上ホームメードの味がする。この上は、是非『カンタベリ物語』の完訳をこの著者に期待したい。

坂本完春（大学文学部教授）

大木清遺稿集編集委員会編

『神の栄光のために』

伝道者大木清の生涯』

（比叡書房 二、〇〇〇円）
（四二〇頁）

大木清氏は、一九四二年同志社大学文学部神学科を卒業し、同年日本基督教団奉天教会に任をうけ同地（現在の瀋陽）に赴き伝道に従事したが、一九四三年召集令状をうけて神奈川県川崎の連隊に入隊、直ちに当時の満州国東安省（現中華人民共和国黒竜江省）に派遣され、ソ連との国境に近い鶏寧（現鶏西）の駐屯部隊に属したが、一九四五年八月一日ソ連軍の侵入に呼応した満州国軍の襲撃をうけ戦死した。

本書には、大木氏が同志社に在学し此春寮で神学部学生同志の共同生活をした頃の

日記と家族への手紙、きよ夫人への婚約時代を含む手紙が含まれ、巻頭に神学部での恩師嶋田啓一郎先生（現同志社大学名誉教授）の「神の栄光のために——伝道者大木清の生涯」と題する心温まる文章が掲げられ、巻末に大木氏の出身教会であった小樽公園通教会の当時の牧師岸本貞治氏と友人上泉浩氏（現福岡中部教会牧師）の追憶文と編集委員会によるあとがきが収められている。

大木氏は、東京商大（現一橋大学）卒業後、明治製菓に入社、小樽支店に勤務中前記の教会で受洗、神の召命を感じて世俗のエリートコースを一擲し福音の使者たらんと同志社の神学科に來り学んだ逸材であった。穏和で内省的でかつ明るい性格は多くの教師学友から愛され尊敬され、卒業後賀川豊彦氏の伝道グループに参加することを願ったが、備えられた場は前記奉天教会であった。日記・書簡の随所に、聖書と神学探求の情熱と、絶えざる祈りを通しての神との対話と、荒々しい戦争の時代における福音の証しの努力と、短かった結婚生活の伴侶きよ夫人や父の顔をついに見ること

のできなかった娘千賀子さんやさらにその接した限りの人々を包む大きな彼の愛を、読者は感じとることができるといえる。

奉天時代、ギリシア語、ラテン語、英語、独語の学習を継続し、プラトーン、アウグスティヌス、トマス・ア・ケンピス、エクハルト、キルケゴール、ブルンナーなどを精読し、そのキリスト教思想探求の努力は応召後ソ満国境防衛隊在隊中も続いていた。死の直前の手紙にまで、オリゲネスやブルンナーが登場することは、大木氏の思索の驚くべき強靱さを物語っている。彼の属する部隊は国境を突破侵入したソ連軍を避けて西方に撤退を開始したが、(目)満州国軍に退路を遮断され集中砲火を浴びて全滅した。「大木氏はあおむけになって倒れていた」という。この類いまれな福音求道の魂は追いつめられて死んだ。彼の道を遮断したものは、当の敵軍よりは、暗い日本の軍国組織と愚劣極まる戦争であった。彼はこの抗し難い状況の中でこれらの日記・書簡を通して懸命の叫びをあげている、と私には思える。天を仰ぎつつ彼は倒れた。あたたかも、つねに天を目ざして歩んだその三

十年の生涯を象徴するかのよう。
きよ夫人は一九六六年天上の夫君のもとに還ったが、忘れがたき千賀子さんは牧師北村滋郎夫人として両親の遺志を継ぎ名古屋で活躍している。本書編集委員は、藤代泰三、里見寛、石田正次郎、高井弘の四氏であるが、困難な資料収集整理編集出版の労に對して、同級生の一人として深甚の謝意を表したい。

遠藤 彰 (大学神学部教授)

『同志社百年史』について

「通年編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

後半期

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直藏総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡亂な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていたものが含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点
頒価・六、〇〇〇円

送料不要の場合 五、四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・一二、〇〇〇円

送料不要の場合 一〇、八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(電話七五二一五一一三〇三八)